

外大の思い出と感謝

著者	野村 和宏
雑誌名	神戸外大論叢
巻	74
ページ	33-35
発行年	2021-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002420/



外大の思い出と感謝

野村 和宏

2004年に大学院英語教育学専攻が創設された際に英米学科の教員として着任し、それ以来、17年間、思い出のぎっしりと詰まった外大での教員生活が一つの大きな区切りを迎えました。定年が近づいてきてもなかなか実感が持てなかったにもかかわらず、最後の2020年の一年は予想もしなかった新型コロナウイルスの広がりを受けて無我夢中で授業対応をしているうちにあっという間に過ぎ去っていき、気がついてみれば終わっていました。ちょうどコロナ感染者数が減少した2021年3月頭の絶妙のタイミングで最終講義も教室とオンラインのハイブリッド形式で開催することができ、お世話になった多くの先生方、職員、学生、卒業生のみなさんに参加いただけて本当にありがたく感じています。私がこうして外大での教員生活を無事に終えることができたのも、多くのみなさんに支えていただいたお陰と、改めて感謝の気持ちで一杯です。

自宅から研究室まで25分と通勤時間が短かったことや土曜日に英語教育学専攻の授業があったこともあり、月曜から土曜まで毎日のように大学に行っていました。研究室で仕事をするのが楽しくなるようにあれこれ仕掛けをしたことから研究室の物もどんどん増えてしまい、結果的に定年となった今、思い出のある物をなかなか簡単に捨てられず片付けに苦労してします。

英語の教育研究に関わるものとして、この神戸外大は素晴らしい先生方や学生に恵まれた最高の舞台でした。英米学科の先生方を始めとして他学科、コースの先生方の立派な研究業績を拝見するたび、いつも多くの刺激を受け、研究に取り組む姿勢を忘れないように気を引き締めていました。自分自身が外大学生、院生のときには文法、語法研究や英語教育学を学んだことから、当初は語法関係の論文を書いたり辞書の執筆をしたりしていましたが、英語教育の現場に関わることが徐々に増え、またメディアやテクノロジー、スピーチ・コミュニケーションについて現場での教育実践を通して研究するようになり、次第に研究の方向性や学会での活動もそちらに向いていきました。

外大に難関の試験を突破して入学してくる学生たちは既に自らの学びを振り返る自律的な学習姿勢ができていた学生が多くいました。また大学院の英語教育学専攻に入学する院生は現役の先生方で、中には自分よりも教育年

数の長いベテランの先生もおられるという状況でした。そうした学生、院生を相手にした授業の時間と空間は、私にとっては緊張感のある真剣勝負の場でした。といいながらも毎回、何かだじゃれを言って笑いを取ることも忘れずに楽しくやっていたのですが。授業で提出してもらった課題には必ずコメントをつけて返却したり、授業の中で形成的学習評価を取り入れて中間成績を返したり、授業の成果を手応えのある目に見える形で残したりと、さまざまな工夫を凝らしてきました。

また普段の授業だけでなく、各地の教育委員会やさまざまな研修会、高校などから依頼を受けて、講演をする機会も多く得ました。外大の教員という肩書きを背負っている以上、当然、実り多い研修会になることが当たり前のよう求められるており、その期待に応えるべく努力してきました。さらに外部の仕事を引き受けることが、授業や会議、学務といった本務に影響のないようにも十分に気をつけてきました。それでも依頼があった際に手帳を確認し、たまたまスケジュールが空いていれば引き受けるといった調子で、結果的にこの17年間もずっと休みなく走り続けた感があります。休講をせずに出かけたこうした外部の講演や出張講義も数えてみると、130回を超えていました。英語教育やスピーチ・コミュニケーションに関わってきた者からすれば、まさに生きた現場を知るまたとない機会でもあり、この経験は結果的に外大での日常の授業構成や教材準備、学生への語りなどにプラスになったと考えています。高校時代に私の話を聞いて英語や外大に興味をもって勉強に励み、外大に合格し、私の専攻英語の授業を受け、ゼミ生となり、教員採用試験に合格し、神戸市や兵庫県の教員として教壇に立って次の世代の生徒を指導している教え子の卒業生が何人もいることも大きな喜びです。

数えきれないほどの外大での思い出の中で何か一つ語るとすれば、やはり『創立70周年記念誌』のことに触れておきたいと思います。2011年から2年間、学生支援部長・理事として役員会に加わりました。その間、5年後に迫った創立70周年に向け、模擬国連世界大会の企画が進んでいましたが、模擬国連に加え、ぜひ何か記録として残したいという思いから『創立70周年記念誌』の発行を役員会で強く主張しました。その結果、予想はしていましたが、学生、院生、教員として長年に渡り外大をよく知る者として私が最適任ということで編集長の大役を引き受けることになりました。大きな意気込みで臨んだもののいざ編集を始めてみると、外大には史料編纂室といった部署が存在しないため、資料収集すらなかなか骨の折れる作業でした。写真なども昔のプリントをスキャンしたり、ネガやポジから探し出したりしました。多くの執筆者による原稿を統一感のある文体に仕上げていく作業も予想以上

に難しいものでした。記念誌は外大の歴史に残っていく大切なものですので思いを込めて作業を進め、最終段階では事務局の川村さんと二人で声を出して読み合わせをしながら念入りに校閲作業を行いました。授業や会議を普段どおり行いながら、さらに外部の仕事も継続しながらの作業はまさに時間との闘いでした。記念式典に間に合うように印刷発行できるかどうかはぎりぎりまで心配でした。式典の直前には、発行が間に合わずに始末書を書いている悪夢にうなされて夜中に目を覚ますことも何度かありましたが、結果的に無事に発行できたことは何よりの喜びでした。

記念誌編集作業を通して外大の歴史を丹念にたどる中で感じたのは、いつの時代にあっても外大が外大としてのプレゼンスを内外に発揮できたのは、教職員、学生、神戸市など関係者のたゆまぬ努力と母校への思いの賜物であるということです。ぜひ外大のホームページからたどって記念誌を PDF で読んでいただければ幸いです。

まだまだたくさんの思い出と感謝を綴ることはできるのですが、このあたりにしておきます。外大がこれからも引き続き 80 周年、90 周年、100 周年をめざして、ますます魅力ある大学として発展を続けていかれますことを心より願っています。英米学科の先生方、英語教育学専攻の先生方、他学科・コースの先生方、職員のみなさん、学生のみなさん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

